

「結びつけ」の空間—— 後期ソ連における構造主義とユーラシア主義

乗松 亨平

構造主義の創始者のひとりであるロマン・ヤコブソン (1896-1982) が、畏友ニコライ・トルベツコイ (1890-1938) や、プラハで親しくしたピョートル・サヴィツキー (1895-1968) をとおしてユーラシア主義の影響を受けていたことは、すでに多くの研究で明らかにされている。¹ とりわけパトリック・セリオの研究は、その影響がたんなるエピソード的なものではなく、ヤコブソンの構造主義の特徴を規定したとする点で、画期的であった。構造という抽象概念と、外縁をもつ空間＝ユーラシアという実在を重ねあわせたことがその特徴であり、構造を概念的な差異のシステムとみなすソシュールの構造主義とは対照的である、とセリオはいう。

しかし、構造主義とユーラシア主義とのこうした関わりが、ヤコブソンがプラハ言語学サークルで活動した 1920～30 年代のあと、いかなる展開をたどったのかは注目されていない。本稿では、後期ソ連において、構造主義とユーラシア主義をそれぞれ引き継いだ代表的人物——記号論のユーリー・ロトマン (1922-93) とエトノス (民族) 論のレフ・グミリョフ (1912-92) をとりあげ、構造の空間化というモチーフを読みとる。20 世紀ロシア語圏における空間の観念史の一端を素描したい。

¹ 代表的なものに以下がある。Boris Gasparov, “The Ideological Principles of Prague School Phonology,” in Krystyna Pomorska et al., eds., *Language, Poetry and Poetics. The Generation of the 1890s: Jakobson, Trubetzkoy, Majakovskij* (Berlin, NY and Amsterdam: Mouton de Gruyter, 1987), pp. 49-78; Patrick Sériot, *Structure et totalité: Les origines intellectuelles du structuralisme en Europe centrale et orientale* (Paris: Presses universitaires de France, 1999); Sergey Glebov, *From Empire to Eurasia: Politics, Scholarship, and Ideology in Russian Eurasianism, 1920s-1930s* (Dekalb: Northern Illinois UP, 2017), chap. 5. 日本語では以下に概要がまとめられている。チャールズ・クローヴァー (越智道雄訳) 『ユーラシアニズム——ロシア新ナショナリズムの台頭』NHK 出版, 2016 年, 第 1 部。逆に、ユーラシア主義がヤコブソンに与えた影響を重要視しない研究としては, Jindřich Toman, *The Magic of a Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle* (Cambridge, Mass. and London: The MIT Press, 1995), pp. 214-215; 朝妻恵里子「ヤコブソンの『言語連合』をめぐって—一言語の『全体性』—」『ロシア語ロシア文学研究』第 39 号, 2007 年, 18-25 頁。

1. 戦間期の構造主義とユーラシア主義

まずは戦間期の構造主義とユーラシア主義の関わりについて、先行研究に依拠しつつ、本稿の関心に沿ってまとめておこう。議論の中心となってきたのは、ヤコブソンの1931年のモノグラフ『ユーラシア言語連合の特徴づけに寄せて』である。そこでヤコブソンは、トルベツコイの論文「バベルの塔と言語混合」(1923)や第1回国際言語学者会議(1928, ハーグ)での提言を受け、「語族」に対抗する概念として「言語連合」を主張する。起源を同じくする言語が時間とともに分岐するという語族の発想とは逆に、起源はばらばらの言語が時間とともに似てくること(収斂)で形成されるのが、言語連合である。

スラヴ系、テュルク系、ウラル=アルタイ系など、起源は多様なユーラシアの諸言語が単一の言語連合をなすことを、ヤコブソンは音韻論にもとづく二つの構造的特徴に注目して証明しようとする。ひとつは単声調であること、もうひとつは子音に硬軟の区別があることである。逆にいえば、そのほかの根拠は示されないわけだが、それをあらかじめ補強するように、ヤコブソンは導入部で「結びつけの方法 метод увязки」なるものを提唱する。

ユーラシアは、独自の特徴——土壌的、植生的、気候的な——の総和として描くことができ、典型的な「複数特徴を共有する」地域であり、特別な、独特で全一的な地理的世界である。この数十年のロシア地理学によるこうした結論は、П. Н. サヴィツキーの著作で総合的に突き詰められた。

[...]異なる平面にある諸現象の結合を捉え、それら平面間の結びつきにも法則的体制を見出すことが、学問の課題である。昨今のロシア語の含蓄に富む言いまわしを学術用語にとりいれて、こうした研究のアプローチを結びつけの方法と名づけよう。この方法の發揮された一例が、發達地域という概念であり、それは社会・歴史的環境とその領域とを単一の全体へと統合する(サヴィツキー文献 a 第4章における用語と定義)。

[...]ユーラシアの歴史的運命は、分割不能なその一体性を確証する。²

ここには一種の循環論法がある。諸言語の音韻構造の分析をとおして証明されるべ

² Roman Jakobson, “К характеристике евразийского языкового союза,” in *Selected Writings I* (’s-Gravenhage: Mouton, 1962), pp. 146-147. 強調原文, [] 内は乗松による。以下同様。邦訳は, R. ヤーコブソン(米重文樹訳)「ユーラシア言語連合の特徴づけに寄せて」『構造的音韻論』岩波書店, 1996年, 287-347頁。

きユーラシア言語連合の一体性が、実際には、ほかの分野との「結びつけ」によって、あらかじめ前提されているようにみえるのだ。いいかえれば、ヤコブソンの論文では、構造分析の結果を積み重ねてユーラシアの一体性が帰納されるのではなく、ユーラシアの一体性が「歴史的運命」として前提されたうえで、それを演繹できるような構造だけがとりあげられている。セリオが次のようにいうのは、このように、構造分析が「結びつけ」を前提とするがゆえだろう。「ユーラシア主義の思想家たちのテキストや学問的マニフェストを検討し、構造主義の歴史との関わりを追跡していると、彼らが実際に構造と呼んでいたものは、要するに総合の同意語だったのだと考えざるをえなくなる」。³

ヤコブソンによれば、異なる言語間の収斂は、たんにそれらの言語が隣接・混淆すれば生じるわけではない。それらの言語があらかじめ構造的特徴を共有し、相手の言語からの借用がとりこまれるための「需要」が存在していなければならない。ユーラシアの言語と西欧の言語が隣接していても、そのあいだに収斂が起こらないのはそのためだ。収斂とは潜在構造の現勢化であり、言語連合とは「運命」の実現なのである。この運命＝構造を共有する地域の外縁を決定すること、とりわけユーラシアと西欧とのあいだにその切れ目があると証明することが、ヤコブソン、トルベツコイ、サヴィツキーの主要な関心事であったとセリオはいう。インド・ヨーロッパ語族の概念への反抗はその表れである。ユーラシア諸語の表記法にラテン文字を用いることを、ヤコブソンが強く批判するのにもそれはみとれる。

「彼ら [ヤコブソンとトルベツコイ] の学問的実践は、實在論的構造主義 [structuralisme ontologique] と特徴づけることができる」とセリオは述べる。サヴィツキーの地理学との「結びつけ」をとおして、構造は概念的差異の体系として理解されるのではなく、その構成要素が土地や植物と同様の実在物として捉えられたという（「ここでは音素が音になっている」⁴）。だが、ユーラシア言語連合をめぐる議論の実

³ Серю П. Структура и целостность. Об интеллектуальных истоках структурализма в Центральной и Восточной Европе. 1920-30-е гг. Пер. Н. С. Автономовой. М., 2001. С. 277. それに対して朝妻恵里子は、総合によって見出される「全体性」と、「構造」とをヤコブソンが区別していたことを強調するが（朝妻、「ヤコブソンの『言語連合』をめぐる」、22-23頁）、両者のあいだに循環的連関が潜在し、ヤコブソンの区別が曖昧さを孕んでいたことは否定しがたいように思われる。「ロシアが一種の構造化された全体 [strukturnen Ganzen] とみなされる」ことをもって、同時代のロシア学を高く評価した論文「ロシアのスラヴ学の現在の前提について」（1929）のくだりはその表れであろう。Якобсон Р.О. О современных перспективах русской славистики. Пер. Д. Баком // Шумилева Е.П. (ред.) Роман Якобсон: Тексты, документы, исследования. М., 1999. С. 23.

⁴ Серю. Структура и целостность. С. 316, 131. ヤコブソンの實在論的な構造観については以下も参照。中村唯史「ヤコブソンの影：ソ連記号学の系譜における『実体—言語—体系』の問題試

在論性は、構造分析によって証明されるべきユーラシアの一体性が、じつはあらかじめ前提とされていることに、最も顕著であろう。「ユーラシア」をすでにある実在として前提し、その空間内の諸構造を「結びつけ」ることでのみ、ユーラシアの一体性は「証明」されうる。セルゲイ・グレボフがいうように、『構造』の实在論的現実性を、データを連ねてアイコン的に表象することで『発見』するというネオ・プラトニズムの展望に、その学問的探究は依拠していた。ユーラシアの存在に疑問の余地はなかった。奇跡のごとき『結びつけ』を明らかにし、際限なく増加させることが課題であった。⁵

外縁をもつ空間領域の实在を前提として、それに内包される構造が析出されるというこの論理は、後期ソ連における構造主義とユーラシア主義の後継者たちへ引き継がれることになる。

2. 「結びつけ」、生物圏、エトノス

トルベツコイは1938年に死去し、その翌年にヤコブソンはプラハを去る。大戦中にたどりついたアメリカにおけるレヴィ=ストロースとの出会いが、フランス構造主義の興隆の端緒となったことは、よく知られている。構造主義のうねりは「雪どけ」期にソ連へと還流し、ヤコブソン自身もたびたび訪ソして、ロトマンを中心とするソ連記号論の発展を促した。

一方、プラハにとどまったサヴィツキーは、大戦直後に逮捕されソ連の強制収容所へ送られる。スターリン死後に釈放された彼は、収容所での知己をとおして、やはり長年の懲役から解放されたグミリョフと文通するようになる。両者の釈放後まもない1956年から、サヴィツキーの死去する1968年まで、プラハとレニングラードのあいだで頻繁に書簡が交わされた。グミリョフが中世ロシア・中央アジア史の研究を発表

論』『SLAVISTIKA』XXXII, 2017年, 19-40頁。

⁵ Glebov, *From Empire to Eurasia*, p. 172. ただしグレボフは、ヤコブソンは「構造を实在化することの問題に自覚的」(p. 225) だったと留保をつける。その根拠とされるのは、「ロシアのスラヴ学の現在の前提について」露訳の一節、「相関する諸系列のシステム, [すなわち] 観察者にとって内在的な構造 система коррелирующих рядов, имманентная для наблюдателя структура」(Якобсон. О современных перспективах русской славистики. С. 24) であり、構造は観察者の主観に内在する非実在的なものだという示唆をグレボフは読みとる。だがこの一節は、ヤコブソンによるドイツ語原文では、「相関する諸系列のシステム, [すなわち] 内在的に観察されるべき構造 ein System von korrelativen Reihen, eine immanent zu betrachtende Struktur」(Roman Jakobson, “Über die heutigen Voraussetzungen der russischen Slavistik,” in *Semiotik: Ausgewählte Texte 1919-82* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1988), p. 55) である。つまり、構造はその外部に準拠することのない自己完結的なものだ、というのがここでのヤコブソンの主張であり、構造の非実在性・観念性を主張しているとまではいえないだろう。

しはじめるこの間、サヴィツキーはかつてのユーラシア主義の観点を年下の文通相手に伝えた。ソ連の学界でグミリョフは長く不遇をかこつが、名声を獲得したペレストロイカ期以降、ユーラシア主義のリヴァイヴァルを牽引し、「新ユーラシア主義」の創始者とみなされることになる。

このように、プラハからソ連へ、構造主義とユーラシア主義がそれぞれ継承された経緯は知られているが、二つの継承経路の関係は注目されていない。両者のあいだに人的・学問的交流はなかったと思われるし、政治的にも、ユダヤ人のロトマンは西欧志向のリベラルで、グミリョフは反西欧・反ユダヤのナショナリストである。だが、グミリョフへの書簡でサヴィツキーが伝えたのは、ユーラシア主義のイデオロギー的側面だけではなかった。

考古学や民俗学を地理学の構成要素に変えるというあなたのアイデアが、私にとってどれほど馴染み深いものであるかは、いうまでもなくご存知でしょう。[...]しかし、このアイデアを主張するにあたっては、歴史には「地理外的」「理念統制的」といってもよい諸要素も作用していることを、忘れないでください。認識にとってもつ意味からいえば、それらの諸要素と地理的要素を高度な統一へと一体化することこそ、最も驚くべきなのであり、それが「発達地域」なのです。[...]かつて私には、偉大な文献学者たちとのまったき「魂の調和」がありました——Н. С. トルベツコイと Р. О. ヤコブソンです。[1963年10月29日付]

私たちの学問的仕事の目的は（ひと絡げにするのを許してください）、そのひとつの転換点にあって、「システム描画[картины-системы]」を創造する、あるいは構築することです。この概念によって私が示唆しているのは、多数の、ときには無限に多数のものをひとつの包摂体に統一すること、分散したものをひとつに集めること、(あなたの言葉を使えば)「何が何に」を精密に規定することです。[...]「システム描画」の概念、あるいは別のいい方をすれば、問題への構造的アプローチ（言語学でそれを鮮やかに示したのが、私の忘れぬ畏友ニコライ・セルゲーヴィチ・トルベツコイです）は、あなたの方法にも近いように思えます。[1964年2月10日付]⁶

ここで説かれているのが「結びつけの方法」であることは、明らかであろう。セリ

⁶ Письма П. Н. Савицкого Л. Н. Гумилеву. 1963-1964 годы // Геополитика и безопасность. 2010, № 1. С. 97-98, 101-102.

オが述べていたように、「構造」は「総合」の同意語と化している。

「構造的アプローチ」のこうした理解は、概念的な二項対立＝差異のシステムとして（ソシュールの）構造を理解した記号論者たちとは、無縁のものに思えるかもしれない。実際にはそうではなかったことを示すため、本稿では、ロトマンとグミリョフに共通するひとつの参照源に注目したい。帝政末期から戦前のソ連にかけて活躍し、「地球化学」の確立者として名声を博した科学者ヴラジーミル・ヴェルナツキーである。その息子グリゴリー（ジョージ）は戦間期のユーラシア主義を担った歴史学者であり、サヴィツキーからグミリョフへの書簡でも話題にのぼっている。父ヴラジーミルは「雪どけ」以降のソ連で再評価され、とりわけ「生物圏（バイオスフィア）」と「精神圏（ヌースフィア）」というその概念は影響力をもった。⁷ ロトマンは「記号圏について」（1984）や『思考する諸世界のなかで』（1990）において、生物圏を参考に「記号圏」という概念を展開し、一方、グミリョフの主著は『エトノス生成と地球の生物圏』（1989。1974年にレニングラード大学に提出され不合格となった博士論文にもとづく）と銘打たれている。

まずはグミリョフから検討しよう。グミリョフがヴェルナツキーの生物圏を参照する理由のひとつは、それが地球上のさまざまな要素を包括的に「結びつけ」る概念だからである。ヴェルナツキーを引用しながらグミリョフはいう。「自己を独立した有機体とみなす従来の見方に代わって [...]『われわれは諸生命有機体をひとつの全体として表現すべきである [...]』。地球に生息する諸有機体は、たんなる個体の総和ではなく『生命物質』であり、『呼吸、栄養摂取、生殖といった、生命を維持する原子の流れによって、周囲の環境と結ばれている [связано]』。このような「生命物質」の循環す

⁷ 生物圏はオーストリアの地質学者エドアルト・ジュースが『アルプスの起源』（1875）で最初に提唱し、精神圏はティヤール・ド・シャルダンの発案にもとづき、1920年代前半にフランスに滞在したヴェルナツキーとティヤール、ベルクソンの弟子の哲学者エドゥアール・ル・ロワのあいだで形成された。その後、ル・ロワとヴェルナツキーはそれぞれの著作で精神圏の概念を展開したが（ヴェルナツキーについては以下の邦訳を参照。ヴラジーミル・ヴェルナツキー（梶雅範訳）『ノースフェーラ——惑星現象としての科学的思考』水声社、2017年）、この概念を世界的に知らしめたのは、ティヤールの遺作『現象としての人間』（1955）である。生物圏の概念が環境学において発展を遂げるにともない、精神圏は環境運動のスピリチュアルな側面と結びついて広がり、UNESCOの理念（UNESCOの初代事務局長を務めた生物学者ジュリアン・ハクスリーはティヤールの信奉者であった）やガイア理論、ニューエイジ運動、マクルーハンの「地球村」論（さらにそれを通じたサイバー・ユートピア論）などに影響を与えた。環境問題への関心が高まった後期ソ連でも精神圏の概念は流布し、1999年にラウトリッジ社から刊行された *The Biosphere and Noosphere Reader* には、ゴルバチョフが序文を寄せている。本稿の内容は、冷戦期に東西を超えて展開したこの観念の系譜に関わるものであり、今後の研究の継続を期したい。

る環境全体を、ヴェルナツキーは生物圏と呼んだ。同様に、エトノスを周囲の環境と結ばれた有機体として考えるのがグミリョフの基本的発想であり、その意味でエトノスは「システム」なのだという。「システムにおいて現実存在し作用する要素とは、対象ではなく結びつき [связи] である」。この結びつきを検討するためにグミリョフは、かつてのヤコブソンと同様、諸学問分野の「結びつけ」を（この語は使わずに）提唱する。「われわれの課題は、歴史学、地理学（風景学）、生物学（環境学と遺伝学）という、三つの学問の交点に設定されるべきである」。⁸ このように、エトノスを独立した個体としてではなく、社会と自然を包摂する全体のなかで生成するものとして考えるグミリョフの思想的背景には、ユーラシア主義者の「結びつけの方法」とヴェルナツキーの生物圏との複合がある。

グミリョフがヴェルナツキーを参照するもうひとつの理由は、生物圏における諸有機体の結びつきを、ヴェルナツキーがエネルギー循環として理解する点にある。「生命 [物質] と非生命 [物質] とがなすこれらすべての多様性は、『生命を維持する原子の移動』ないし『生物圏における生命物質の生化学的エネルギー』により結ばれている [связано]。／このエネルギー形態は、物理学者が研究するほかのエネルギーと同様に、リアルで実効性をもつものである」。⁹ 地球上の生命と同じく、エトノスもまたエネルギー循環によって生成・維持されるとグミリョフは考え、このエネルギーを「熱情性 *пассионарность*」と名づける。ヴェルナツキーは生物圏のエネルギーの主要な供給源を太陽とみなしたが、グミリョフもまた、熱情性は地球外の宇宙（ただし太陽とはかぎらない）から供給されると主張する。宇宙から強力な光線がまれに照射されることで、熱情性を多量に保有する「熱情人」がある地域にまとまって現れ、新しいエトノスが生まれるのだという。

このように、生物圏という全体の外部に発する、「リアルで実効性をもつ」エネルギーによって、全体内部の結びつきが保証される。だがこのエネルギーの「リアル」な実在性は、直接的なかたちでは論証されない。グミリョフによる延々たるその論証は、エトノス生成を地球内部の特定要因に還元して説明することはできない、という消去法の積み重ねによっている。新しいエトノスを誕生させるエネルギーは、「どうやら地

⁸ Гумилев Л.Н. Этногенез и биосфера Земли. М., 1994. С. 385, 128, 52. この点に関する思想的背景としてはさらに、後期ソ連におけるシステム理論やサイバネティクスの流行も指摘できる。See: Mark Bassin, *The Gumilev Mystique: Biopolitics, Eurasianism, and the Construction of Community in Modern Russia* (Ithaca and London: Cornell UP, 2016), pp. 25-26. これらは記号論にとっても重要な背景をなした。

⁹ Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 386.

地球上の自然条件とも社会条件とも関係がないようであり、そうすると地球外で発生する以外にありえない。「たしかに、近宇宙に関する現状の知識では、この仮説を厳密に証明することはできないが、代わりにそれと矛盾する事実もみつかっていない」。¹⁰ それ自体としては証明しえない実在を前提に、「結びつけ *увязка*」は所与の「結びつき *связь*」へと変換される。戦間期のユーラシア主義においてと同様、論証されるべき全体の一体性は、実際には証明不要の実在として前提されているのだ。

ただし、ヴェルナツキーとグミリョフには重要な違いがある。ヴェルナツキーの全体＝生物圏は、地球を覆いつくしており、ひとつしか存在しない。それに対してグミリョフの全体は複数存在し、たがいにに対して堅く閉じられている。「スーパーエトノス」と呼ぶそれを、グミリョフはこう定義する。「ひとつの地域で同時期に発生した諸エトノスのグループで、歴史のなかでモザイク状の全一性として現れる」。具体的には「ロシア」や「キリスト教世界（＝西欧）」がその代表であり、文明圏と理解すればよい。エトノス生成の契機となる宇宙からの光線が、地球上の特定地域だけを照射するものであることが、その形成の原因である（グミリョフによれば、人類史上、ユーラシア大陸はそのような照射を計9回受けている）。スーパーエトノスの「モザイク状の全一性」についてグミリョフは、「エトノス内部の分裂こそ、エトノスの全一性を支える条件であり、エトノスを堅固にする」¹¹ と述べ、スーパーエトノスエトノスサブエトノスコンヴィクシアコンソルツィアという「分裂」の階層構造を提示する。だが、内部の分裂・多様性によって逆説的に強化されるこの全一性はスーパーエトノスを上限とし、それを超えると分裂はただの分裂でしかなくなってしまう。異なるスーパーエトノス間の混淆は本質的に不自然であり、どちらかの滅亡を導くか、グミリョフが「キマイラ」「アンチシステム」と呼ぶ悪しき異形を生み出すだけだ。その代表とされるのがユダヤ人である。

このように、グミリョフにおいて全体は、熱情性の照射という実在的根拠をもつ、強固な空間的外縁によって閉じられている。結びつきはその内部でのみ見出される。この閉じられた境界をロシアと西欧のあいだに引くことこそ、彼の理論体系の目的であったといえるだろう。

¹⁰ Там же. С. 392, 583. 熱情性については以下で詳しく論じた。乗松亨平「空間の不安——一九八九年とロシア・ナショナリズムの比較文明学——」『思想』2019年10月号、101-108頁。

¹¹ Гумилев. Этногенез и биосфера Земли. С. 168, 111.

3. 記号圏——対話の空間化

ロトマンによるヴェルナツキーの参照に移ろう。この問題に関する古典的論文で、エイミー・マンデルカーは、バフチンの「1970-71年の覚書」(『言語的創造の美学』(1979)所収)における記号論批判が媒介となったと論じている。「覚書」でバフチンが数度だけ記す「ロゴス圏」という概念をその傍証とする、マンデルカーの議論はやや強引だが、バフチンの批判をロトマンが意識していたこと自体はおそらくまちがいない(ロトマンは晩年のバフチンをタルトゥに招聘しようとしたほどだった)。記号論は生きた言葉をそのコンテキストから引き離し、変化することのない、いわば死んだコードとしてのみ扱っていると、バフチンは「覚書」で批判した。この批判を受けてロトマンは、生物圏を参考に記号を「有機化」し、記号による意味生産を生殖的メタファーで考えるようになった、とマンデルカーは論じる。¹² ただし、記号システムを孤立した閉鎖的構造として考えてはならないということは、すでに60年代末からのロトマンの重要な課題であった。複数の構造間の対話や翻訳に着目することで、ロトマンはこの課題を克服しようとする。いいかえれば、構造の結びつけ／結びつきこそが、後期ロトマンの主要なテーマだったのであり、記号圏はそのとりくみのなかで考案された。

記号圏の概念を最初に提唱した論文「記号圏について」の冒頭部で、ロトマンは現代の記号論の課題を次のように指摘する。

そこには危険が潜んでいる。ヒューリスティックな合目的性(分析上の利便性)が、対象の実在的性質[*онтологическое свойство*]と受けとめられるようになるのだ[...]明確で機能上、一義的なシステムなどというものが、現実に機能するうえで、それだけで孤立して存在することはない。そんなシステムを分離してとりだすことができるのは、ただヒューリスティックな必要によってのことである。[...]それらのシステムが機能するのは、なんらかの記号的連続体のうちに浸っているかぎりにおいてであり、さまざまな組織階層に属するさまざまなタイプの記号的形成物が、その連続体を満たしている。B. И. ヴェルナツキーが導入した「生物圏」という概念にちなんで、われわれはこのような連続体を記号圏

¹² Amy Mandelker, "Semiotizing the Sphere: Organicist Theory in Lotman, Bakhtin, and Vernadsky," *PMLA* 109:3 (1994), pp. 385-396. ロトマンの記号圏とラヴロックのガイア理論の類似も指摘されている(p.392)。「記号圏」という用語はのちに生物記号論でも使われるようになり、ロトマンの記号圏と結びつける試みがなされている。Kaie Kotov and Kalevi Kull, "Semiosphere Is the Relational Biosphere," in Claus Emmeche and Kalevi Kull, eds., *Towards a Semiotic Biology: Life Is the Action of Signs* (London: Imperial College Press, 2011), pp. 179-194.

と名づけよう。¹³

グミリョフがヴェルナツキーを参照した二つの理由との共通性が、ここには明らかである。まず、エトノス／記号システムを、孤立したものとしてでなく、結びつきのなかで捉えるため。この結びつきは、「記号圏内部の多様性はその全一性を意味する」¹⁴という、グミリョフがエトノスについて述べていたのと同じ逆説性にもとづいている。次に、この点はグミリョフよりずっと明確に目的化されているが、エトノス／記号システムに実在的根拠を与えるため。孤立して自閉的な記号システムというものは、ヒューリスティックな仮想であり「実在的性質」ではないが、複数の記号システムを結びつける記号圏は、その「現実の機能」の基盤となる。「記号圏について」から6年後に発表された『思考する諸世界のなかで』では、記号圏はバフチンのいう「生」により接近し、「経験」に等しいものとされる。

発信者と受信者、そして両者を結ぶ単一の経路からなる機構だけでは、まだ作動しないだろう。そのためには、この機構が記号空間 [= 記号圏] に浸っていなければならない。コミュニケーションのすべての参加者は、なんらかの経験、記号活動への慣れを、あらかじめ有しなければならない。こうして逆説的にも、あらゆる記号行為に対して、記号的経験が先行しなければならないのである。¹⁵

このようにロトマンは、記号システムという構造の仮想性を指摘しつつ、それが現実に機能するための前提条件となる、記号圏という実在を導入したのだといえる。アレクサンドル・ピャチゴルスキーがのちに次のように述べたのは、基本的に正当であろう。「当時気づいていなかった、[対象記述の] 方法の実在化 [онтологизация] によってわれわれは、必然的に対象の自然化へと導かれざるをえなかった——その究極が、ロトマンの記号圏という着想である」。¹⁶ 諸構造は「結びつけ」られるのではなくあらかじめ結びついており、実在的空間がその結びつきを保証するという論理が、ここ

¹³ Лотман Ю.М. О семиосфере // Избранные статьи. Т. 1. Таллин, 1992. С. 11-12.

¹⁴ Там же. С. 17.

¹⁵ Лотман Ю.М. Внутри мыслящих миров // Семиосфера. СПб., 2004. С. 250.

¹⁶ Пятигорский А.М. Заметки из 90-х о семиотике 60-х годов // Неклюдов С.Ю. (сост.) Московско-тартуская семиотическая школа. История, воспоминания, размышления. М., 1998. С. 154. この問題については以下でも論じた。乗松亨平『ロシアあるいは対立の亡霊——「第二世界」のポストモダン』講談社選書メチエ、2015年、86-94頁。記号圏とロシアという実在的空間との重ねあわせを指摘したこの拙論に対し、本稿では以下、いくらかの修正と発展を試みたい。

にもみられるのだ。

ただし、「経験」にあくまで「記号的」という形容詞がついていることは、記号圏を
実在や生そのものと重ねることへの、ロトマンの留保を示してもいる。1982年3月19
日付のボリス・ウスペンスキー宛書簡でロトマンは、ヴェルナツキーから受けた感銘
を次のように記す。「テキストが存在できるのは [...] 別のテキストがそれに先行する
場合だけです [...]。ちょうど私はヴェルナツキーに [...], 生命が発生しうるのは生
きているものからだけである、つまり [別の] 生命がそれに先行する場合だけである、
という考えを見出したところです」。¹⁷ 記号は記号によってのみ基礎づけられる自律
した領域であるという考えは、「記号圏について」冒頭近くでの、記号圏の空間性をめ
ぐる但し書きにもみてとれる。

В. И. ヴェルナツキーが用いた「精神圏」という用語と、われわれが導入する「記号圏」と
いう概念とを混同しないよう、警告しておかねばならない。[...] 精神圏が物質的・空間的
な存在をもち、われわれの惑星の一部を占めるとすれば、記号圏の空間は抽象的性格を帯
びている。しかしそれは、空間観念がここでは隠喩的意味で用いられている、ということ
では決してない。われわれが論じているのは、自己のうちに閉じた空間に帰される諸特徴
をもつ、明確な圏域である。¹⁸

記号圏は物質的空間ではないという主張は、サヴィツキーが対象としたような、土
地や植生といった物質的実在と、記号圏を結びつけることを退けるものだろう。さら
に、記号圏は地球の一部を占める空間でもないという主張は、記号圏をロシアやユー
ラシアといった空間と重ねないよう、「警告」するようにみえる。だがそんな「抽象的」
空間が、いかにして記号システムの「現実の機能」を基礎づけるのか。実際、「記号
圏について」と『思考する諸世界のなかで』を比較すると、この「警告」とは裏腹な
変化が生じているように思われる。

両者の重要な違いは、記号圏間の関係をめぐる記述にある。「記号圏について」の末
尾でロトマンは、記号圏間の階層構造を提示した。「記号圏のあらゆるレベル——個人
の人格や個々のテキストから、グローバルな記号的統一まで——は、入れ子状になっ
た複数の記号圏として現れるかのようであり、そのひとつひとつが、対話の参加者（記
号圏の一部）であると同時に対話の空間（記号圏全体）なのである」。¹⁹ ここでロトマン

¹⁷ Лотман Ю, Успенский Б. Переписка. М., 2008. С. 417.

¹⁸ Лотман. О семиосфере. С. 12.

¹⁹ Там же. С. 24.

は、グミリョフのエトノスと同様、複数の小記号圏がひとつの中記号圏のなかに含まれ、複数の中記号圏がひとつの大記号圏のなかに含まれ……という、階層状の包含関係をイメージしている（それがスーパーエトノスのような上限をもたず、地球全体にまで拡大される点はグミリョフと異なる）。より正確にいうと、中記号圏との関係において、それに包含される小記号圏は記号圏ではなく、中記号圏の「一部」である「対話の参加者」＝記号システムとして現れ、中記号圏のほうは、それらの記号システムが対話＝機能するために必要な前提条件をなす。そしてこの中記号圏が、みずからを包含する大記号圏との関係においては、今度はその大記号圏の一部たる記号システムとして現れる。つまりここで語られているのは、記号システム間の対話的結びつきと、それらの記号システムと記号圏のあいだの包含関係だけであって、記号圏どうしが直接結びつくことはない。

一方、『思考する諸世界のなかで』では、記号システム間のみならず、異なる記号圏のあいだの対話が論じられる。「あらゆる記号圏は、無定形で『野蛮な』空間に浸っているのではなく、おのおのの組織を有する別の諸記号圏と接触しているのであり […] ここにはたえず交換が生じる」。こうして記号圏が、対話の前提条件であるだけでなく、対話の参加者ともなる結果、記号圏とそれに包含される記号システムとの論理的区別は曖昧化する。このことは、「記号圏について」では、おもに記号圏の外縁を指して使われていた「境界」という空間的イメージが、記号圏内外に拡大されたあらゆる対話関係に適用されることに、顕著に表れている。「記号圏内部の空間を外部の空間から分かち境界という観念は、初歩的で粗雑な分割にすぎない。実際には、記号圏の全空間は、さまざまなレベルの境界、言語やさらにテキストの境界によって分かたれており、これらサブ記号圏それぞれの内部空間が、なんらかの記号的『自我』をもっている」。²⁰

まとめると、「記号圏について」では、記号システム間の対話を可能にする前提条件だけに、外縁の境界をとともなう記号圏という空間的イメージが与えられていた。それに対し、『思考する諸世界のなかで』では、記号圏によって基礎づけられる記号システムも空間化し、対話そのものが境界接触という空間的イメージで捉えられるようになる。そして同時に記号圏も、境界を接するほかの記号圏と対話関係にあることが語ら

²⁰ *Лотман. Внутри мыслящих миров. С. 267, 263.* 「記号圏について」にも、記号圏内部の関係を境界として語った箇所はわずかに存在するが、それら記号圏内部の境界は、「これらの境界、さまざまな構造や下位構造のあいだの戯れ」(*Лотман. О семиосфере. С. 17*) というくだりにみられるように、記号圏とは異なる「構造」間の境界であることが示されており、記号圏（の外縁を指す「境界」）と、記号圏に包含される構造（間の「境界」）とは、論理的に区別されていると考えられる。

れる。このように、記号圏の内外へ拡大された空間的イメージにもとづいて、『思考する諸世界のなかで』では、歴史上のさまざまな事例をとりあげ、記号圏における中心と周縁の逆転といった現象が語られる。たとえば、ゲルマン民族の大移動はヨーロッパの中心と周縁を逆転させ、あるいはロシアは歴史上、キリスト教の国教化とピョートル大帝の改革という二度、ヨーロッパの周縁に組み込まれて中心の文化を受容した。こうして記号システムとの論理的区別が曖昧になった記号圏は、「記号圏について」での「警告」（物質的ではなく抽象的だが、隠喩的ではない空間性）とは裏腹に、融通無碍に実在的空間を指し示す隠喩と化すように思われる。

この「警告」でロトマンは記号圏を、「自己のうちに閉じた空間に帰される諸特徴をもつ、明確な圏域」と述べていた。だがロトマンにおいて、記号圏の外縁の閉鎖性は相対的なものであり、「記号圏について」でも、記号圏の外縁＝境界は、記号圏内部とその外の混沌（と内部からはみえるもの）とを翻訳するとされている。それは一面では、スーパーエトノスの外縁を絶対的に閉じられたものとみなすグミリョフとは対照的な、ロトマンのリベラリズムを表しているだろう。だが他方で、『思考する諸世界のなかで』における記号圏概念の曖昧化は、こうしたリベラルな境界観の困難も示している。構造は自閉し孤立したものではなく、開かれており、他の構造と結びついている——これが、戦間期のユーラシア主義者とグミリョフ、ロトマンとに共通する見方であった。このような構造間の結びつきは、それを包含する実在的空間によって正当化される。ユーラシア主義者とグミリョフは、この実在的空間の閉鎖性を強調した。これはイデオロギー的であると同時に理論的な要請である。結びつきを基礎づける実在的空間という全体は、実際には構造を「結びつけ」るメタレベルの観察者の視点をオブジェクトレベルに投影したものであり、それが閉じた単一の視点であるからこそ、諸構造は結びつくことができるからだ。

「記号圏について」でロトマンは、対話が生じるには、「伝達されるテキストとそれに対する応答とが、なんらかの第三の視点からみると単一のテキストを形成しなければならない」²¹と述べており、対話を可能にする前提条件＝記号圏が「視点」の変換であることに、自覚的であったといえる。閉じ（構造）の開かれ（結びつき、対話）がまた閉じ（全体性）を必要とするというこのジレンマを、ロトマンは、閉じていると同時に開いている境界の概念によって克服しようとした。だがそれは、全体性の閉じと構造の閉じとを無差別化して、構造を基礎づける全体としての記号圏の概念を曖昧にしてしまい、結局は、閉じていない全体は全体たりえないことを露呈しているよ

²¹ Там же. С. 19.

うにもみえる。逆にいうと、このような理論的危険を冒してでも、開かれを閉じに回収しないことがロトマンにとっては重要だった。グミリョフの理論体系は、反対に、全体の閉じを絶対的なものとすることを目指していた。「結びつけ」の空間は、その閉じ／開かれをめぐる振幅をとめないながら、戦間期の構造主義／ユーラシア主義以降、20世紀のロシア語圏でひとつの思想的系譜を形成したのである。

The Space of “Tying Up”: Relationships between Structuralism and Eurasianism in the Late Soviet Era

NORIMATSU Kyohei

Many scholars have scrutinized the relationship between early Structuralism and Eurasianism around the Prague Linguistic Circle during the interwar period. This paper analyzes the development of this relationship in the late Soviet era, focusing on Yuri Lotman, the leader of the Moscow-Tartu semiotic school, and Lev Gumilev, the founder of Neo-Eurasianism.

The key to this relationship is the “method of tying up,” a term coined by Roman Jakobson in his controversial monograph *For the Characterization of the Eurasian Language Union* (1931). The unity of Eurasia was to be proved through the “tying up” of various structural features — linguistic, cultural, and geographic — shared in Eurasia, but Jakobson actually seems to presuppose this unity, calling it “destiny.” In other words, he picks out only those structural features which lend themselves to being “tied up” into unity. Structural analysis is preconditioned by the existence of an integral space which legitimates the “method of tying up.”

We can find similar reasoning in Lotman and Gumilev. The commonality between them is manifest in the influence that Vladimir Vernadsky’s concept “biosphere” exerted on them. In the biosphere, all living things are connected with each other and with non-living things through circulation of energy. Similarly, Gumilev argues that an ethnos is connected, or “tied up,” with its environment, and Lotman proposes the idea of the “semioshpere” which ties together various semiotic systems. At the same time, there is a crucial difference between Gumilev and Lotman

regarding openness and closure of the space of “tying up.” While Gumilev emphasizes the absolute closure of a “superethnos,” which can never merge with other superethnies, Lotman argues that the boundaries between semiospheres are open; this, however, inserts theoretical confusion into his argument. In this way, we can trace development of the idea of the space of “tying up” from the first Structuralists and Eurasianists to their successors in the late Soviet period.